

〔研究ノート〕

新疆ハミ地方のイスラム化 —中国新疆イスラム教小史⑥—

丸山 鋼二

〔Research Notes〕

Islamization of Hami : A Short History of Islam in Xinjiang ⑥

Koji MARUYAMA

Abstract

"Hami", the east area of Xinjiang, became the next target of the Islam Force and the Eastern Chaghatai-Khanate which conquered Turpan at the end of the 14th century. The Hami King, a descendant of Chaghatai-Khan, payed tribute to the Ming Dynasty when it was established at the second half of the 14th century. Entering the 15th century, the Ming Dynasty strengthened its rule by setting up "Hami Garrison" and granting titles of nobility "King Zhongyi Wang", "Zhongshu Wang" to the Hami Kings.

Although Hami was temporarily occupied by the Oirad in the middle of the 15th century, the tributary relation with the Ming Dynasty resumed soon. However, after three invasions of the Eastern Chaghatai-Khan in 1473, 1488, and 1493, Hami was finally occupied in 1513. From then Hami never belonged to the Ming Dynasty again. The Islamic clerics in Turpan and Hami played an important role for the occupation of Hami. Especially the Eshdin Khoja family was power eminent. By receiving privilege from the Eastern Chaghatai-Khan, it became the largest feudal lord in the Tarim Basin. When the confrontation with the Eastern Chaghatai-Khan deepened, its position was replaced by Tariqa Naqshbandiya of the Central Asia in the middle of the 16th century.

【目次】

はじめに

1 ハミ地区の地理と歴史

- ①ハミ地区の地理的位置と重要性
- ②ハミの歴史と宗教

2 明朝とオイラートのハミ占領

3 東チャガタイ汗国のハミ占領

4 ハミのイスラム化

- ①イスラム教のハミ浸透
- ②ハミのイスラム聖職者

5 新疆のイスラム化とエシュディン・ホージャ家

- ①「ホージャ派」の新疆進出
- ②エシュディン・ホージャ家の登場
- ③エシュディン・ホージャ家の権勢
- ④チャガタイ後王家とエシュディン・ホージャ家の対立

おわりに

【キーワード】ハミ 東チャガタイ汗国 明 オイラート エシュディン・ホージャ家

はじめに

クチャとトルファンの征服を達成したイスラム勢力と東チャガタイ汗国にとって、次の目標はハミであった。中国と西アジア・中央アジアを結ぶシルクロードの重要な要路であったハミは今日新疆の行政区域に属しているとはいえ、直接中国が実効支配していた西部の国境地帯・甘粛と接しているところで、中国の影響力が強く漢人の居住も多かった地域でもあったので、中国王朝としても簡単に放棄することはできなかった。また、トルファンやハミといった地域は歴史的に食糧など多くの生活物資の供給を中国に依存しており、新疆タリム盆地の他のオアシスとは状況が異なっていた。

本稿では、最初にハミ地区の地理的位置と歴史・宗教状況について説明した後、第2節で明朝の「哈密衛」設置とモンゴル・オイラト部のハミ占領を、第3節で東チャガタイ汗国がイスラム勢力に協力してハミを明朝と争奪し獲得していく過程を、第4節でハミのイスラム化の進展に貢献した聖職者について、第5節で新疆のイスラム化のなかで特殊で重要な役割を果たし権勢を誇った「聖裔」エシュディン・ホージャ家について述べる。

なお、新疆の地名やイスラム用語に対する中国語の表記は()で示した。

1 ハミ地区の地理と歴史

①ハミ地区の地理的位置と重要性

ハミは天山山脈南麓の東端に位置し、トルファンの東方、敦煌の西北方にあるオアシスである。北部はカルリク(喀爾里克)山脈で(4,888 m)、東部・西部がハミ盆地として開けている。気候は温帯大陸性乾燥気候で、平均気温9.8～9.9℃、最高気温43℃、最低気温-32℃、年間降水量17.2ml(or35ml)、年間蒸発量2,800ml、年間日照時間3,352時間、無霜期間182日(or222日)である⁽¹⁾。トルファンは平均気温14.1℃、年間降水量15ml、年間蒸発量2,714ml、年間日照時間2,999時間、無霜期間256日であるから、トルファンと同じくらいの乾燥地帯である。

ハミ盆地のオアシスもトルファンと同じように、かつてはカレーズ(地下水路)や雪解け水を利用して灌漑を行っていたが、現在ではポンプ井戸・用水路・ダムが整備されている。特産物として「ハミ瓜」が有名である。現在、可耕地140万畝、草地1,862万畝、林地314万畝がある。

ここは古来より天山南北路から河西回廊に通じる出入口であり、北方遊牧民の南進拠点の一つであるとともに、中国の中原と西域を結ぶ要害の地であった。したがって、中国の歴代王朝はハミを西域経営の玄関口として、ここに軍政施設を置き、軍隊を駐屯させ屯田を行なってきた。中国本土と西域・中央アジアの各地を往来する朝貢使節・外交使節・貿易商人・隊商(キャラバン)は必ずここを通過して交易を行ない公文を交換した。

元朝滅亡後、モンゴル高原(漠北)は東のタタールと西のオイラトが対立して統一されておらず、草原ルートが使用できなかったため、中央アジアや西アジア各国と明朝との陸上貿易はほとんどこのハミ街道に集中していた。西域の各国は貿易や朝貢を通じて、中原から組織^{ろお}りの紗^お(うすぎぬ)[「紗羅」]⁽²⁾、繻子^{しゆすお}織りの綸子^{りんす}・緞子^{どんす}(あやぎぬ)[「綾緞」]⁽³⁾、磁器、茶葉、鉄器、牛黄(牛の胆嚢の中)にできる結石、てんかん・熱病などの漢方薬として珍重)、麝香(ジャコウ、香料や漢方薬として

(1) 新疆維吾爾自治区測繪局編『新疆維吾爾自治区分県地図冊』ウルムチ・新疆美術攝影出版社、1998年、110頁。
畢亞丁・張郁君・柳用能編著『走遍新疆』ウルムチ・新疆美術攝影出版社、2000年、119頁。

使用)などを購入した。また、西方諸国の朝貢に対して、明朝は献上された品物に応じて相応の絹織物(「絹疋」)、あやぎぬ(「彩緞」)、銀銭等を「お返し」の賜り物(「回賜」)として与えた。ハミヤトルファンに至っては、「衣食・日用品で用いるもの」はすべて中原に頼っていた。

このように、中央アジア各地の支配者はこの「朝貢ルート」は「カネのなる道」(「金路」)であり、ハミを制することは「カネの道」の生命線を制することであり、莫大な経済利益を得ることができるとみていた。こうしたハミの経済戦略的位置のため、東チャガタイ汗国のトルファンの支配者(ウイグルスタン・ハン家)、オイラト(ワラ瓦刺)部の首領と明朝はハミを自己の手中に収めようと争ったのが14世紀後半～15世紀のハミの歴史である。

②ハミの歴史と宗教

ハミの古称は「昆莫」。古くは匈奴の支配下にあったが、後漢朝が73年匈奴を破って屯田を行って「伊吾盧」といい、宜禾都尉を置いた。北魏の時代には伊吾郡が置かれ、唐代には630年に西伊州を置き、のち2年後に伊州と改称した。唐末にウイグル人が占拠してからはカムルCamul(コムルQomul)と呼び、モンゴル帝国になってもそれにならぬ元朝は「哈密力」「合迷里」(ハミルKhamil、Qamil)と記し、甘肅行省の管轄下に置いた。明代になってから「哈密」(ハミHami)の字が用いられるようになり、哈密王は明朝に服した。永楽4年(1406年)に「哈密衛」が置かれて、明朝の西域経営の拠点となった。が、100余年経った1529年にはハミから完全に撤退した。その頃には、カラシャールの統治を受けていたという。

清朝になって、嘉峪関を閉ざしてハミ、トルファンとの関係を絶ったり、1655年再び入貢を許すなどしていた。ハミヤトルファンは明代以来の恩寵になれ、しきりに糧食などの賜与を求めた。ハミは1679年、ジュンガル部のガルダンの侵入を受けてその支配下に入った。その後もジュンガル部のツェワン・アラプタンから脅威を受けたハミは、1697年(康熙36年)に清朝に内属した。清朝は翌年、本来モンゴルなど遊牧諸部族に対して施行していたジャサク制をハミにも敷き、ハミ回部の頭目ウバイドゥラー(額貝都拉)をジャサク(旗長)一等ガルハン(達爾漢)に封じた。18世紀半ばにジュンガル部が平定されて後、1759年(乾隆24年)に哈密庁と駐防兵が置かれた。哈密庁は烏魯木齊都統の軍政下にある新疆東路(ほか北路と南路)に編入された。東路は中国内地と関係が深く、漢人の居住者も多かったので中国内地と同じ州県制をしき、陝甘総督の所轄とされた。ハミはトルファンとともに回部二旗として知られ清末に至る。1884年(光緒10年)、新疆省設置と同時に、哈密庁は鎮迪道に属する哈密直隸庁に昇格した⁽⁴⁾。

民国2年(1913年)には庁から県になり迪化道に属した。中華人民共和国になって、1961年にハミ県から分離して、ハミ鎮を基礎としてハミ市が設立されたが、翌年10月には取り消された。1977年にハミ市が再設置され、1983年9月9日には哈密県を廃止してハミ市に編入した。現在も新疆への交通の要路で、蘭(州)新(疆)鉄路・公路が通っている⁽⁵⁾。

ハミは今日ウイグル人ムスリムの街として知られるが、『中国清真寺総覧』にはハミのモスク(清真寺)としてウイグル民族のものは一つも記されておらず、わずかにハミ市の著名な大モスクとし

(2) 紗とは、一定間隔を置き隙間を作るように、二本の経糸(たていと)が緯糸(よこいと)一本ごとに絡み合う絹織物で、織り目が粗く、薄くて軽い。夏の衣服地や蚊帳とした。

(3) 綸子・緞子とは、経(たて)縐子の地にその裏組織の緯(よこ)縐子で文様を表した、地が厚く光沢・つやのある絹織物のこと。長江下流域の名産。日本では京都の西陣や群馬県桐生などが有名。

(4) 前嶋信次・加藤九祚共編『シルクロード事典』芙蓉書房、1993年、「ハミ」の項。

て1881年(清光緒七年)に始まる「哈密陝西清真寺」が挙げられているのみである。その始まりは陝甘回民の大反乱の鎮圧のためにハミに駐留していた陝西の回民軍(「健銳軍」)が廃止され、その一部がそのままどまって定住するようになり、草葺きの家屋を臨時の礼拝寺としたことであった。その後、回族の上層人士たちが寄付を集めて拡張し、1898年に清真寺が完成した。今日、坊民(教民)は1,200戸余り、すべて陝西籍の回族で、ガディム(格迪目)派に属する⁽⁵⁾。

他方、『地球の歩き方：西安とシルクロード』には、ハミ王墓(回王墓)のなかにあるエイティガール寺院のことが記されている。ハミ王墓は清朝時代の1697年から中華民国期の1930年までの9代223年にわたる歴代の王と王族の眠る墓地である。現在、3つの建築物が残っているが、その中で最大のものが第7代モハメド・ビシル王の廟である(東西20m、南北15m、高さ17.8m)。その西側に17世紀初期につくられたエイティガール寺院が建っている。建設面積は2,000平方メートル、3,000人を収容できる広さで、内部には108本の太い柱と花の図案が描かれた見事な壁が残されている。ローズ節(断食明けの祭り)やクルバン節(犠牲祭)には多くのイスラム教徒が集い賑わうが⁽⁷⁾、1990年代初期には普段使用されておらず、ローズ節とクルバン節の時のみ開放されたという⁽⁸⁾。

ハミ王墓の近くには、「ケイス墓(聖人墓)」がある。これは唐の貞観年間に太宗・李世民的招請に応じてイスラム教の先知ムハンマドがケイス(蓋斯)、ウワイス(吾外斯)、ワンガス(万Gas)の3人の弟子を派遣したという伝承を記念して、1945年に建設されたマザールである。3人は中国で生涯を終え、ワンガスは広州に、ウワイスは甘肅回回堡に、ケイスは甘肅と新疆の境界・星星峽にそれぞれ葬られた。ケイスの遺骨は1939年の軍事施設建設のための破壊により1945年にハミに移されたので、この名がある⁽⁹⁾。

2 明朝とオイラートのハミ占領

14世紀にイスラム勢力(東チャガタイ汗国のヒジル・ホージャ)がトルファンを征服すると、トルファンのイスラム勢力は次の目標としてハミの争奪をめざした。

①明の「哈密衛」設置とハミの「忠義王」「忠順王」冊封

明初、元を北方に追いやった太祖・洪武帝は甘肅地方をおさめて西域諸国に入貢を促した。1372年(洪武5年)、明の將軍・馮勝は嘉峪関の地を経略し、ここに城関を築造して中外を分かち境界とした。嘉峪関は肅州(酒泉県)西方40km、嘉峪山の西麓にある、シルクロードの重要な要路として

(5) 前掲書『走遍新疆』119頁。閻常年主編『中国市県辞典』北京・中共中央党校出版社、1991年、1,287頁。

(6) 吳建偉主編『中国清真寺総覧』銀川・寧夏人民出版社、1995年、475頁。哈密陝西清真寺は改革開放がはじまってから、1983年に修繕と拡張工事がなされたが、なお54部屋が未返還であったと記されている。なお、その続編として、吳建偉主編『中国清真寺総覧続編』銀川・寧夏人民出版社、1998年が出版されているが、ハミ市のモスクは挙げられていない。

(7) 『地球の歩き方 西安とシルクロード1999～2000版』ダイヤモンド社、1999年、207頁。なお、同書によれば、「エイティガール」とは新疆のイスラム寺院の通称で、アラビア語とペルシア語の複合語で「祝祭日に活動をする場所」を意味するという。カシュガルにあるエイティガール寺院は有名であり、いまは日常的に開放されており、筆者も訪問したことがある。

(8) 『地球の歩き方 中国Bシルクロード'93～'94版』ダイヤモンド社、1992年、154頁。

(9) 前掲書『走遍新疆』123頁。前掲書『地球の歩き方 西安とシルクロード』208頁。

古来から險要の地であった。

1380年(洪武13年)、ウナシュリ(忽納失里)というモンゴル・チャガタイ系の王が明に使節を送り、臣服を示した。1390年頃、ウナシュリはハミを支配するようになり、ハミ王家の基礎を築いた。ウナシュリは代々甘粛の西部に所領を有していた北元トウグステムル・ハーン(脱古思帖木兒)麾下の首領(肅王)で、明と交易を行う一方、西域との往来を阻んでいた。そこで、洪武帝は1391年、ハミに君臨していたウナシュリ(兀納失里)を征伐したが、ハミからの馬の輸入を促進するために懐柔策をとった。

『明実録』によると、同年「別失八里王黒的兒火者」なるものの使節が南京に入貢し、太祖の大いなる歓待を受けている⁽¹⁰⁾。これはビシュバリク王(東チャガタイ汗)ヒジル・ホージャのことである。かれはドグラト部からチャガタイ王家の統治を回復し、東チャガタイ汗国の都をビシュバリクに移したハーン(在位1389～1404?年)で、その後も明朝とは使臣の往来を欠かさず、密接な関係を続けていた。

他方で、彼は敬虔なイスラム教徒として、イスラム暦795年(1392/93年)には武力で火州(カラホージャ)とトルファンを併呑し、さらにイスラム暦799年(1396/97年)にはハミ地区に侵攻し、それらの地区でイスラム教の普及を推し進め、仏教に対して壊滅的な打撃を与えたことは、拙稿「新疆イスラム教史⑤」で述べた。

ヒジル・ホージャの死後、ハーンに即位した長子シャイム・ジャハーン(沙迷查汗、在位1405?～07?年)も、その後を継いだ弟ムハンマド・ハーン(馬哈麻汗、在位1407～15年)も明朝に何度も使臣を派遣し、明朝との間で密接な関係を築いていた⁽¹¹⁾。モンゴル各部族は明と敵対しつつも明との交易によって利益を獲得しようとする「二面外交」を実施していた。

永楽帝(在位1402～24年)が即位すると、消極的な対外政策を転換し、世界主義が中華主義にとって代わった。1404年(永楽2年)、永楽帝は西北国境地帯であるハミ地区の管轄を強化するため、元の末裔でウナシュリの弟アंक(エンケ)・ティムール(安克帖木兒)が来朝した際に彼をハミの「忠義王」に冊封した。翌年、アंक・ティムールがオイラート(北元)のため毒殺されると、ウナシュリの子トト(脱脱)を「忠順王」に封じた⁽¹²⁾。そして次の年(1406年)には「哈密衛」を置き、当地の頭目を都督・千戸・百戸等の官に任命するとともに、忠順王の治政を支援するために特使を派遣した。

「衛」とは、明代に治安維持と国防のためにおかれた軍事組織であり、各省の衛は省の軍事司令官である都指揮使司(都司)が統率した。その下で、「衛」の長である「都督」がいくつかの州・府の兵(「所」と呼ばれた)を管轄した。「所」は守禦千戸所・守禦百戸所を指し、1州の兵を管轄した。1衛は10千戸所よりなり、千戸所の指揮官が千戸である。1千戸所は10百戸所からなり、その指揮官が百戸である。1百戸所には総旗2名、1総旗には小旗10名がおり兵を率いた。1衛の兵数は原則として5,600名である。1393年には都司17、衛329、千戸所65が置かれた⁽¹³⁾。

明の「忠順王」トトは明に対して協力的ではなかったが、そのあとをついで忠義王に封じられたテウリ・ティムール(兔力帖木兒)は明の藩臣としてすこぶる忠実で、明使の西域への往来に便宜を

(10) 嶋崎昌「第二章 東トルキスタン 第四節 トルキスタンの形成とその発展」、江上波夫編『中央アジア史<世界各国史>』山川出版社、1987年、422頁。

(11) 《維吾爾族簡史》編写組『維吾爾族簡史』ウルムチ・新疆人民出版社、1991年、134頁。

(12) 前掲書『シルクロード事典』249頁。

(13) 京大東洋史辞典編纂委員会『新編東洋史辞典』東京創元社、1980年、「衛所」の項目(88頁)。

図った。しかし、永楽帝なきあと、1426年トトの子ブタシュリ(ト答失里)が忠順王に封じられたが、同年テウリ・ティムールが死ぬと、忠義王・忠順王の二王が併立した。二王はその後も明朝への朝貢を続けたが、二王の併立は王権を衰弱させ、オイラートの干渉を防ぐことができなくなった。

②モンゴルのハミ占領(1443年)

オイラートOirad(瓦剌、衛拉特)は、12世紀に史上に登場したモンゴルの一部族で、はじめイェニセイ川の上流で半獵半牧の生活を送っていたが、13世紀初めチンギス・ハーンに臣属した。14世紀後半にはアルタイ山脈付近の草原地帯に進出し、1368年の元朝滅亡後はモンゴル高原に逃れてきた北元(1371～88年)やそれを継承したタタール(韃靼)と対抗してモンゴルの覇権を争った。

15世紀にトゴン(脱懽)がオイラートの部長として登場すると、1418年(永楽16年)には明朝に入貢して順寧王を襲封し、明との融和を図る一方、1434年には仇敵のタタール部のアロタイArughtai(阿魯台)を襲殺するなど、東南に根拠するタタール部との抗争を繰り広げたが、タタール部のトトブハ(脱脱不花)に押さえられた。1433年トトブハ(在位1433～51年年)がカガンに即位した。

トゴンの死後、オイラート部長についてエセンEsen(也先)大石は当初、タタール部と協力関係を築こうと、トトブハをカガンに推戴し、また自らの姉をトトブハの妻として姻戚関係を築き、自らは太師(天使の補佐役)として実権を握った。西北モンゴルを根拠として勢力拡大を図るエセンはまず明朝に服属するハミ王国の忠順王ブタシュリ(ト塔失里)に対して武力的威嚇と婚姻手段を持って屈服を迫り、ブタシュリはトファン(脱斡)大石の娘ヌウエンダシュリ(弩温答失里)を妻にめとった。そして、1443年にハミを占領し、甘粛の沙州(敦煌)・赤斤の諸部を降した。さらにモンゴル東方に対しても遠征し、1446～47年には大興安嶺東のウリャンハイ三衛⁽¹⁴⁾を蹂躪し、満洲の女直を服属させ、黒竜江下流のギリヤーク族をうち、朝鮮に降服を迫った。

この間、エセンは明に対しては、(1)朝貢貿易、(2)回回(ムスリム)商人を通しての隊商貿易、(3)兵器食糧補給のための密貿易の3種の貿易を巧みに使い分けて、対明貿易をさかんに行なっていた。が、明朝が貿易を拒絶すると、1449年大挙侵入し、北京北方・河北省懷来県付近の土木堡で大勝し、明朝皇帝の英宗・正統帝(在位1435～49)を捕虜とした。

1451年、エセンは立太子問題を口実にタタール部のトトブハ・カガンを殺してモンゴルを統一し、大元天聖大可汗と称して、オイラート部の全盛時代を現出した。が、1454年、太師の地位を求めた部下のアラク知院Alaq Chingsan(阿剌知院)に襲撃され、その支配も短期間で終わった。エセンの死後、オイラート部は次第に勢力を失い、主力は西方に移動した(一部は青海に移動した)。

本節をまとめると、明初に「哈密衛」が設置され、チャガタイ系のハミ王を「忠義王」や「忠順王」に冊封し、14世紀後半から15世紀半ば頃まで明とハミは朝貢関係を築いていた。1443年にオイラートのエセンが一時ハミを占領していたことがあったが、まもなく朝貢関係は復活した。

(14)ウリャンハイ三衛とは、明初(1389年)に明の太祖が大興安嶺東方の地に、泰寧(たいねい、洮南付近)・朵顔(どやん、洮児河の上流)・福余(ふよ、チチハル付近)の三衛を設置し、故元の遼王アジャシュリ(阿札失里)らを長官として支配させた。古来この地方は遊牧民と農耕民とが混住しており、モンゴルと中国との緩衝地帯となるところであった。ウリャンハイ三衛は、明朝に入貢し、馬市を通じて交易しながら、他方タタールやオイラートの先導となって、たびたび北辺に侵入した。逆に、タタールやオイラートの侵入を受けて、明朝に救いを求めるときもあった。

3 東チャガタイ汗国のハミ占領

①ユヌース・ハーンのハミ占領(1473年)と哈密都督ハーンシェンによる奪回(1482年)

ヒジル・ハーンの時ハミを攻撃したことのある東チャガタイ汗国では、その後、1415年、ムハンマド・ハーンが死去すると、兄シャーヒジャハーンの子ナクシ・ジャハーン(納黒失只罕)が即位した。が、3年後にはシール・アリー(失児阿里)の子ワイスに殺害され、ワイスがハーンに立った。その頃、オイラートがモグーリスタン東部に侵攻してきたため、東チャガタイ汗国は重心を東方のイリ溪谷と天山以南へと移さざるを得ず、都をイリバリクに移した。1434年のワイス・ハーンの死後、ハーン位争いが起こり、次子のエセン・ブハがハーンを宣言したが、まもなくティムール帝国の支援を得てサマルカンドからユヌースが東チャガタイ汗国に戻ってきて、ハン国西部でハーンを唱えた。1462年エセン・ブハの死去後、子のドースト・ムハマド(朮思忒馬黒麻)がハーンを継承した。1468/69年彼が死去すると、ユヌースが正式にハーンに即位した。このように、ハーン位争奪戦が激しく、また北方からオイラートの圧迫もあり、数十年間ほどハミに介入する余裕はなかった。

エセン大石の死後、オイラート部の主力が西方に移動すると、明朝はヌウエンダシュリの子ブレグ(ト列革)にハミ王国の忠順王の王位を継承させた。しかし、1460年ブレグが亡くなると、忠順王を継承するものがなく、ヌウエンダシュリが王母として23年間も摂政をつとめたため、ハミ王国の権力は弱体化した。その弱体の隙を突いて、トルファンのスルタン「阿力」(アリー)がこれを併呑しようと、1473年「その城を攻め、王母をとらえ、金印を奪い、兵を駐屯させた」(『明史』)という。この「アリー」とは東チャガタイ汗国のユヌース・ハーン(羽奴汗)と考えられており、かれはアクスを占領してウイグルistanをも領有しトルファン一帯で兵を率いて活動したことが確認されている。

ユヌース・ハーンのハミ攻撃に対して、明軍も反撃したが効なく、また他方では「アリー」は以前と同じように明に朝貢を続けていた。ユヌース・ハーンのハミ占領(1473年)により、王母の外甥で畏兀児都督のハーンシェン(罕慎)はハミの民を連れて甘肅西部の苦峪に移住せざるを得なかった。まもなく、ユヌース・ハーンの部隊はオイラート部のアーマサンチ(阿馬桑赤)大石に破れ、細渾河に退いた。ハーンシェンは1482年に赤斤・罕東の2衛と連合し、本部の1万余りを指揮してハミを夜襲し、八城を降しハミ城を奪回した。

②アフマド・ハーンのハミ占領(1488年と1493年)と明との和平(1497年)

明朝は1488年、正式にハーンシェンをハミ忠順王に冊封した。

しかし、同年11月、東チャガタイ汗国から自立してウイグルistan(トルファン)のハンとなったアフマド・ハーン(阿黒麻汗)はハーンシェンが王族の出身でないのを口実に、ハミを再び奪おうと兵を挙げて攻めてきた。彼は最初、ハーンシェンとの姻戚関係になって盟約を結ぶと偽装して、ハーンシェンを城外に誘い出して殺害し、それから一挙にハミを攻略した。この占領の時、ハミの軍民が明朝領内の肅州に避難したが、そのなかで苦峪城(瓜州の東)に寄居した哈密衛都指揮の職名をもつアムラン(阿木郎 Amulang)の奏上では「ハミ西方のカラコイ(その後スム・カラコイ)とタシュ・バルガスン(他失ト刺哈孫 Tash Balaghasun、別名タシュ・ブラク)などの地区にいた頭目はもと哈密に属していたが、いまは同じく苦峪に住んでいる」と報告している⁽¹⁵⁾。それは1473年のユヌース・ハーンのハミ占領時にハーンシェンがハミの民を連れて苦峪に移住したことを指しているの

あろう。いずれの時もイスラム勢力はカラコイなどの仏教徒を意識的にハミから追い出そうとしていた。

アフマド・ハーンのハミ占領という暴挙に対して、明朝は関所(嘉峪関)を閉じて朝貢を拒絶したり賜り物を減らしたり朝貢使節を拘留したりするなどの措置をとって、アフマド・ハーンに圧力をかけた。同時に、忠順王の王族(明に封じられた安定王)であるシャンバ(陝巴)を忠順王に立てたので、アフマド・ハーンは苦境に陥り、ハミ衛管轄の11の城、500人の住民と金印を返還せざるを得なかった。

しかし、アフマド・ハーンはこれに懲りず、1493年春ふたたびハミを襲撃し、シャンバを連れ去った。明朝は1495年、甘肅巡撫の許進に軍を統率させてハミを奪回させ、さらに許進はトルファンをも征した。そして172名の各地のムスリムの朝貢使節を拘留するとともに、再び関所(嘉峪関)を閉鎖した。アフマド・ハーンの勝手気ままな兵乱により、貢ぎ品は運び出せず、朝廷からの賜りものも受け取ることができず、朝貢貿易は中断され、中央アジア各地の経済に大きな損失をもたらしたため、各地のムスリム商人はアフマド・ハーンのやり方に強烈な不満を持った。その結果、1497年明はアフマドと和した。『明史』は「アフマドは悔いて、(1499年)シャンバを送り返して忠順王とし、ハミは平和を回復した」と述べる⁽¹⁶⁾。しかし、この頃、つまり15世紀末か16世紀初めにはハミの仏教勢力は基本的に消滅し、ほぼイスラム化されたとみられる。

アフマドは2度オイラート部を大敗させ、勢威は大いに振るっていた。オイラート人からは「アラジャ・ハーン(阿剌扎汗)」（殺戮のハーンの意）と呼ばれた。が、その後、1502/03年ころ、新興のウズベク(キプチャク汗国の東領を支配したシャイバン[昔班尼汗]家治下のモンゴル族)のため敗死した。このころから、モグーリスターンの本土(イリ地方からタシュケントに至る地域)はドグラト家やオイラート部、カザフ人の圧迫を受けたため、チャガタイの子孫たちはタリム盆地に退き、天山以北を失った。アフマドのあとは長子マンスールがウイグリスタン・ハン家を継いだ。アクスやトルファン地方を保つのみであった。マンスールはアフマド同様、トルファンに自己の都城を置いていた。

マンスールの弟サイド(賽依德)が1524年ころドグラト家のアミール、アバー・ベクル(異密阿巴伯克爾)を討ち、カンシュガルやヤルカンドを奪い、新しくカシュガル・ハン家をおこした。こうして、チャガタイ汗国の伝統はタリム盆地東西のウイグリスタン・ハン国とカシュガル・ハン国に受け継がれたが、ウイグリスタン・ハン国はマンスールが1545年に没すると急速に衰え、のちカシュガル・ハン家に併合されたと思われる。明末の17世紀初め、トルファンやハミはカシュガル・ハン家のマフムード・ハーン一族が支配していた⁽¹⁷⁾。

③ マンスール・ハーンのハミ占領(1513年)

明とアフマドとの和平の後も東チャガタイ汗国と明朝のハミ争奪戦は続いた。1505年、シャンバが没し、その子バイヤージ(拝牙即)が忠順王に冊封された。ところが、1513年バイヤージが明朝に背いてウイグリスタン汗家の都トルファンに逃走するという事件が起こった。マンスール・

(15) 佐口透著『新疆ムスリム研究』吉川弘文館、1995年、226頁。

(16) 李進新著『新疆宗教演變史』新疆人民出版社、2003年、318頁。

(17) 嶋崎昌「第二章 東トルキスタン 第四節 トルキスタンの形成とその発展」、前掲書『中央アジア史』424～425頁。

ハーン(満速児汗)はその機会にハミを占領した。マンスール・ハーンはイスラム聖職者のホージャ・タージュディーン(和卓他只丁)にハミ城の防備を命ずるとともに、明朝に使節を送り、バイヤージでは国を守ることができないので、代わりに鎮守となることを願い出た。

これ以後、マンスール・ハーンは長期にわたってハミを占領し、さらには国境の関門・嘉峪関から中国内に侵入しては紛争を引き起こした。1524年にはハミを拠点に2万の騎兵を率いて甘州(張掖)・肅州(酒泉)を侵犯し、略奪を働いた。この時には明朝の国境の官兵が何とかマンスール軍を撃退したが、マンスール・ハーンはこれに甘んじず、引き続き国境侵犯・略奪を繰り返したため、明朝も対応に疲れ果ててしまった。明朝はついに1529年(嘉靖8年)、国境から兵を引き民を安んじること、嘉峪関を閉鎖し朝貢を断絶すること、以後ハミにはかかわらないことを決定した。

トルファンに政治勢力とハミのイスラム教上層勢力が結託して、時には帰属し、時には反乱を起こすといった事態に、明朝が対応できなくなったのである。また、明朝自身も国庫に十分な財力がなくなり、朝廷内部でもハミ問題をめぐって主戦派と放棄派の争いが絶えなかったが、最終的に放棄派が勢力を得た。

本節をまとめると、15世紀後半から、その領域をイリ渓谷と天山以南に移した東チャガタイ汗国(よってウイグルスタン汗国とも呼ばれる)は、ハミ占領の行動を起こした。記録上①ユヌース・ハーンによる1473年、②アフマド・ハーンによる1488年と93年の2回、③マンスール・ハーンの1513年、の4回をたどることができる。最後の占領を除いて、そのたびに明朝とハミ王によって奪回されたが、ついに1529年明朝は嘉峪関以西に対して断念し、百年以上にわたった明朝によるハミ争奪戦は幕を閉じた。

ハミ関連年表(明代)

- 1380年、甘肅西部のチャガタイ系王族ウナシュリが明に入貢。
- 1391年、洪武帝がハミのウナシュリを討伐。
- 1392/93年、東チャガタイ汗国のヒジル・ハーンがトルファンを占領。
- 1396/97年、ヒジル・ハーンがハミを攻撃。
- 1404年(永楽2年)、永楽帝はアंक・ティムールをハミの忠義王に冊封。
- 1405年、ウナシュリの子トトがハミの忠順王に冊封。
- 1406年、「哈密衛」を置く。
- 1418年、ワイス・ハーンが東チャガタイ汗国の都をビシュバリクからイリバリクに遷都。
- 1426年、ブタシュリが忠順王に冊封。忠義王テウリ・ティムールが死去。以後、忠順王・忠義王の二王が併立。
- 1428/29年、ワイス・ハーン死去、東チャガタイ汗国がイリ地方とトルファン地方とに分裂。
- 1443年、オイラト部長エセンがハミを占領。1454年エセン死去。
- 1460年、忠順王ブレグ死去。オイラト人で王母のヌウエンダシュリが摂政。
- 1473年、ユヌース・ハーンがハミを占領、金印を奪う。ハミ部民は甘肅西部の苦峪に移住。
- 1482年、哈密の都督ハーンシェンが哈密城を奪回。
- 1488年、明はハーンシェンを忠順王に冊封。
東チャガタイ汗国のアフマド・ハーンがハーンシェンを殺害、ハミを占領。畏兀児部民が肅州に避難。
- 1493年、アフマド・ハーンが再びハミを占領。
- 1495年、甘肅巡撫の許進がハミを奪回。
- 1497年、明とアフマドが和平。
- 1505年、忠順王シャンバ死去。バイヤージが忠順王に冊封。
- 1513年、バイヤージのトルファン逃走事件を契機に、マンスール・ハーンがハミを占領。
- 1515年、マンスール・ハーンがシャイフ・フセインの情報により肅州の王子荘・苦峪・赤斤等に侵入。
- 1516年、明朝が哈密衛回都督シャイフ・フセインを逮捕、21年処刑。
- 1524年、マンスール・ハーンが甘州・肅州を侵犯。ホージャ・タージュディーンが肅州で弓矢で死亡。
- 1529年、明は嘉峪関の閉鎖、朝貢の断絶を決定。

4 ハミのイスラム化

①イスラム教のハミ浸透

ハミにはすでに14世紀にイスラム教が伝わっていた。洪武14年(1381年)にアーラオディーン(阿老丁)という名のハミの「回回」が明朝に入貢し馬を献上したという記録が『明太宗実録』に残されている。15世紀初めにはイスラム教は急速に広まっていった。『明史・西域伝』によると、明初のハミの住民には三種の人たち(「三部」)がいたという。すなわち、「一つは回回(ムスリム)で、一つはウイグル(畏兀兒 Uyghur)で、一つはカラコイ(哈刺灰 Qaraqoi)である。彼らの頭目はそれぞれ独立していたので、王は統制することができなかった。」

「畏兀兒」は当地の住民のことで、大多数の人は引き続き仏教信仰を保持していた。「哈刺灰」は主にハミに居住していたオイラート・モンゴル人を指し、その中の少なからぬ人たちはイスラム教を信仰していた。あるいはQaraqoiはテュルク語で「黒羊」という意味のテュルク族とも解釈され、中央アジアに分布していた一部族であるとされる⁽¹⁸⁾。「回回」はトルファン等から移住してきたムスリム及びイスラム教に改宗した当地の住民を指す。「三種の蕃夷は同じく一つの都市(哈密城)に同居していたが、その種と類は貴くなく、相互に勢力が拮抗し、またもともとからモンゴルに服していた」(『明史・西域伝』)⁽¹⁹⁾。また、哈密城の東北の北山(カルリク=タグを含む)にいた恐らく遊牧民系のシャオレットウ(小列秃 Shaoletu)族と野人メクリト(Mekrit)族がしばしば哈密城を襲撃して掠奪を働いていたことが知られ、彼らはモンゴル帝国・元朝滅亡後の遺臣・残党と見なされていたため、明朝は元の末裔・威武王ナフリ(納忽里)[前記のウナシュリのことと思われる]の後代を忠順王に立てて、「三部」を統制した。「三部」にはそれぞれ頭目(すなわち「都督」)がおり、自部の住民を管轄した。

当時ハミでは依然として仏教が主要な宗教であり、明朝はハミにも「僧綱司」等の官職を設けていた。「僧綱司」は僧侶を監督し寺院を管理する行政機関で(「綱」は取り締まるの意)、日本でも僧官として僧正・僧都・律師の三綱が定められていた。仏教貴族勢力は権勢に頼ってムスリム民衆を抑圧していたので、「回回」と「畏兀兒」は宗教問題をめぐって激しい対立感情を持っていた。それゆえ、トルファンの支配者と明朝がハミを争奪していた時、ハミのイスラム勢力がトルファンの側に靡くのはごく自然なことであった。

ハミのイスラム勢力の頭目はトルファン側に密かに情報を伝えたり、明朝を欺いて城ごと降服したりした。明朝にとって実に心腹の患であった。兵部尚書(天子直属の軍事大臣)の馬文升は「アフマドはますます傲慢となっている。大体ハミはすべて回回教の地である」と、後任の兵部尚書胡世寧も「ハミ城を3回とったのは、みなハミの回回の裏切り者による内通のためであった」と奏上した。明朝はハミのイスラム勢力に打撃を与えるために、「長くアフマドに内通していた狡猾なハミの回回20余人」を逮捕し、広西に追放した。

②ハミのイスラム聖職者

このように、ハミの反乱においてはイスラム教の上層分子が重要な役割を果たしていた。その代表的な人物がホージャ・タージュッディーン(和卓他只丁)とシャイフ・フセイン(写亦虎仙)であった⁽²⁰⁾。

(18)前掲書『新疆ムスリム研究』224頁。

(19)前掲書『新疆宗教演変史』319頁。

(20)前掲書『新疆宗教演変史』320～321頁。

ホージャ・タージュッディーンはエシュディン・ホージャ家の後裔で、トルファンクチャ地区のイスラム教教長(シャイフ・イスラム謝赫伊斯蘭)をつとめていた。かれは若い時、マー・ワラー・アンナフルに赴いてナクシュバンディー教団の中興の祖、ホージャ・アフラールの教えを受け、師の命によってアフマド・ハーンのもとに遣わされて以来、アフマド・ハーンとマンスール・ハーンの父子両ハーンの宗教導師を50年余りもつとめ、トルファン支配集団の中で高い地位にあり、トルファンのイスラム化に大きな役割を果たした。かれは「商業に従事し農業にいそしむ」ことを通じて、大量の財富を収奪し私腹を肥やす一方で、ちょっとした恩恵と「布施」によってムスリム大衆の信頼をだまし取った。トルファン政権は大きく彼の支持に依拠し、支配者の多くの政策決定は彼に操られていた。

ホージャ・タージュッディーンは「聖戦」を語って民心を扇動し、アフマドとマンスールのために積極的に策謀をめぐらせた。アフマド・ハーンの2回のハミ占領は彼の後押しによるものであった。明朝の彼に対する評価も厳しく、『明史』は「マンスール・ハーンは忠順王バイヤージに投降を促して明に反逆させ逃走させた後は、頭目ホージャ・タージュッディーンにその国を守らせた。けだし始めから終わりまで患わせること40余年。しかるに、ホージャ・タージュッディーンは再び賜与を求めるなど、情理に反すること益々甚だしい。」と記している。

ホージャ・タージュッディーンはハミのイスラム教の頭目シャイフ・フセインと結託していた。かれはシャイフ・フセインとマンスール・ハーンの仲を取り持ち、シャイフ・フセインにハミの内情を密告させていた。また、シャイフ・フセインのために結婚の媒酌をし、マンスール・ハーンがその妹をシャイフ・フセインに降嫁されるように説得した。のち、シャイフ・フセインがある件でマンスール・ハーンに対して罪を犯した時、マンスール・ハーンは彼を処刑しようとしたが、ホージャ・タージュッディーンは仲裁してやめさせた。シャイフ・フセインは命を救ってくれた恩に報いようと、ハミ城と金印をホージャ・タージュッディーンに渡して管理させた。

1515年、ホージャ・タージュッディーンはシャイフ・フセインから甘州や肅州の国境防備情報を密かに入手すると、マンスール・ハーンに兵を率いて肅州の王子莊・苦峪・赤斤等に侵入させた。甘州の辺疆大臣はホージャ・タージュッディーンの気焰をそぐために彼の弟ホージャ・サージャル(和卓撒者児)を拘留した。ホージャ・タージュッディーンは弟が拘留されたことを聞くと、怒って再びハミ城を占領し、マンスール・ハーンにそこに移住するよう勧めた。明朝は繰り返し彼にハミ城と金印を返却するよう申し渡したが、かれは返却しようとしなければならず、節度もなく金銭を支払い褒美を与えることを要求させた。そして、ついに1524年、ホージャ・タージュッディーンは肅州の攻撃を指揮している時に、明軍に矢で射殺された。

シャイフ・フセインはもとハミで紅粉(「胭脂粉」)を販売する商人であったが、のち明朝によって回回部を主管する哈密衛都督に抜擢された。朝廷は彼にマンラー・ハッサン(満刺哈三)、畏兀兒都督エンコボラ(奄克勃刺)、シュビンエンター(失并烟答)らと共同で忠順王を補佐し国を守るよう命じていた。もともとシャイフ・フセインは王位・爵位を狙う野心をもっていた。アフマド・ハーン、マンスール・ハーンやホージャ・タージュッディーンがハミを占領した時は、いずれも彼が内通者の役割を果たしていた。アフマド・ハーンがハミを攻撃した時、シャイフ・フセインは姻戚関係を結ぶという策謀を利用してハーンシェンを取り除いたし、アフマド・ハーンと通じて忠順王シャンバをトルファンに誘拐した時は、マンスール・ハーンの庶母の弟チェン・ティムール(真帖木児)をハミ王に立てようと画策し、明がバイヤージを忠順王に立てると、「スルタン・マンスール王子はあなたの政務の処理が公平でないことを怪しんで、あなたを殺しにやってくるかもしれない

から、先に帰順して災いを逃れるべし」と告げて、バイヤージを脅した。脅かされたバイヤージは印を持って自分からマンスール・ハーンに身を投じるほかなかった。

シャイフ・フセインは畏兀児総督のエンコボラらの頭目には東方の肅州に逃げるよう勧め、ハミ城から仏教徒を追い出し、ハミを長期間統治する目標を達成した。かれはさらに甘肅方面にも手を伸ばそうと、「甘肅の風土は過ごしやすいし、そこを奪おうとしても難しくない」とか、「スルタン・マンスールが先にハミを占領すれば、人馬を率いて肅州に侵入するのに都合がよい。もし肅州を占拠できたとしても、甘州を得ることができないことを心配している」と言ったりして、マンスール・ハーンの歡心を買おうとした。

彼の悪辣な行為をもって、明朝は1516年、かれを逮捕して法廷に引き渡した。1521年、斬首に処され、妻妾・子女は没収されて家奴隷とされ、財産は官に編入された。

しかし、結局のところ明の統治が及ばなくなり、ハミはイスラム勢力に支配され、新しいイスラム教地区(ダル・アルイスラーム)となった。ハミ王族もまもなくイスラム教に改宗し、バイヤージは忠順王を襲名すると「スルタン(速壇、蘇丹)」と自称した。また、「カラコイ」と「ウイグル」の両部族は肅州に逃げてからすでに久しく、帰れないまま当地の住民となった。こうして、イスラム教は新疆の最東部に達し、ジュンガル盆地のオイラートが蔵伝仏教を信仰する以外、新疆北部に進出してきたカザフ族や天山西部で自立したキルギス族等もまもなくイスラム信仰を受け入れた。こうして、イスラム教が新疆の主要な宗教信仰となった。

5 新疆のイスラム化とエシュディン・ホージャ家

①「ホージャ派」の新疆進出

これまで「新疆イスラム教小史④⑤⑥」で、モグーリスターン・ハーン国の開祖トゥグルク・ティムール・ハーンとモグール人がイスラム教に帰依してから、イスラム教が新疆タリム盆地の南部から中部のクチャ、そして東部のトルファン・ハミへと広まっていく過程を検討してきた。その過程で、エシュディン・ホージャ家の活動が新疆のイスラム化に重要な役割を果たしたことが見て取れる⁽²¹⁾。

エシュディン・ホージャ家の祖先は中央アジア・ブハラのスーフィ教団の首領で、いわゆる「ホージャ派」(ホージャの身分をもつ人)に属するとみなされてきた。エシュディン・ホージャ家は「ホージャ」の肩書きを掲げて中央アジアから新疆タリム盆地に最初に入ってきたイスラム教ホージャ貴族であった。かれらはイスラム教の布教だけでなくスーフィズム(神秘主義)の思想を広める面でも重要な影響を与えた。

「ホージャ」(Khwaja)は「主人」を意味するペルシア語で、「先生」「旦那」「老爺」「長官」「東家」「長者」の意味で用いられている。この言葉はもとサーマーン朝(873～999年、都ブハラ)の官職名に発し、ペルシアや中央アジアでは広泛に使用され、高位高官の名望家や身分の高い人に対する尊称となった。中国語では「和卓」「火者」「霍加」「和加」「華哲」「華者」「虎者」等に音訳・転写されている。

しかし、中央アジアや新疆のイスラム教の用語では「ホージャ」は一般に「聖裔」を指し、アラビア語の「サイイド」(賽義徳)と同義であった。「聖裔」とは、イスラム教の開祖ムハンマド(穆罕默徳)の後裔を指す以外に、初期の四大カリフ(アブー・バクル、ウマル、ウスマーン、アリー)の

(21)本節は、基本的に前掲書『新疆宗教演変史』「第五節 伊斯蘭教和卓貴族勢力的興起」および馬品彦・趙榮織著『新疆宗教史略』(ウルムチ・新疆大学出版社、2001年)「第三章 第一節 額西丁和卓家族勢力的興起」に基づく。

後裔を指す使い方もあった。新疆のホージャはしばしばムハンマドの娘ファーティマ(法蒂瑪)と夫で第4代カリフのアリーとの後代が広く広がった子孫であると自称していた。

中世の中央アジア帯には数多くのホージャがおり、その中の一部の人の身分は確かなものではなかった。「ホージャ」という肩書で中央アジアから新疆に入ってきたイスラム教徒も、その血統や身分はさらに問題であった。かれらはみな手中に「家系図」や「聖裔族譜」といったたぐいのものを持参していたが、それらの家系図が偽造された痕跡は明白であった。しかし、当時は彼らの血統や身分の真偽が追求されることはなく、いったん公認されるとムスリム民衆の中で崇高な地位を享有し、宗教貴族として人びとから尊崇された。そして、ホージャは次第にスーフィ教団の首領の地位を固めるとともに、世代継承の教統制度を形成した。

ティムール帝国ではイスラーム指導者ヒエラルヒーの中で最上位に位するサドル職に就するのはサイドに限られた。このように、ティムール帝国以後、ホージャの地位はますます強くなり、中央アジア帯で封建的特権を享受する宗教勢力を形成した。

ホージャがスーフィズム信徒に対する吸引力をそなえていたのは、まさに彼ら自身が宣揚するように、彼らが「聖裔」という特殊な血縁関係の力を借りて「直接アラー(真主)の啓示を拝受する」ことができ、世間の人びとに自然の力では創造することができない「奇跡」(カラマツト喀拉瑪特)を顕示することができたからであった。ホージャの支配下にあるスーフィ派はホージャ家の教主を擁し、信徒の盲目的崇拝を受け、内部には厳密な組織系統を形成したので、イスラム教のなかでは比較的活発な宗教団体となった。イスラム教地区の政治支配者もこれらの宗教勢力を利用してその統治を維持する必要があったし、中央アジアのホージャ勢力も新疆タリム盆地ではチャガタイ後王の支持という政治権力を利用して発展することができた。

② エシュディン・ホージャ家の登場

イスラム教の歴史文献によると、エシュディン・ホージャの祖籍はブハラにあり、その祖先シュジャーウッディーン・マフムード(叔札烏丁・馬合木徳)はかつてブハラのスーフィ派の著名な長老であったという。チンギス・ハーンがブハラを攻略した時、シュジャーウッディーン・マフムードは新疆カラコルム山脈の某地に流された。その後、彼の子孫はロブノール(羅布泊)地方のロブ・チェタイ(羅布・怙台)鎮に移住した。この地方はトルファンとホータンの間の重要都市で、マルコ・ポーロの旅行記にも「商旅が必ず通るところで、隊商は通常ここで沙漠を越えるために宿泊・休息・食糧の準備をしなければならない」と記されている。

エシュディンの父ジャマルッディーン(賈拉里丁)はここでスーフィズムの伝道を行なったが、住民の反対に遭い、わずかに15人が門徒になっただけと伝えられている。その後、ロブ・チェタイが砂嵐のために埋没してしまうと、ジャマルッディーンは民衆をつれてアクスに逃げのび、そこでボロジ(播魯只)に保護されていたトゥグルク・ティムールに遭遇した。その遭遇のエピソードはまさに劇的なものであった。

トゥグルクは兵を連れてアクスで狩猟をしていた。モンゴルの法令によれば、王室が狩猟(巻き狩り)をしている時はあらゆる人は避けなければならない、違反したものは処刑された。しかし、ジャマルッディーンは回避が間に合わず、捕らえられてしまった。トゥグルクは彼がイスラム教の聖職者(教士)であるのを見て、彼を侮辱しようとした。ジャマルッディーンは宗教哲理に富んだ答弁を巧みに活用して自己の尊厳を守ろうとし、トゥグルク・ティムールを感服させた。ハーンは彼を奥まった静かなところに呼んで、詳細にイスラム教の信仰・教義やムスリムの義務を問いただ

して、非常に満足した。「もし私がハーンとなって最高権力を手に入れたならば、私の所に来なさい。私はイスラム教に帰依すると約束しよう。」と伝えたという。この密談後まもなく、ジャマルッディーンは病気を患って死去した。臨終前に、かれはエシュディンに「私はもう明日をも知れないから、一つのことをおまえに託す。この若者がハーンになったら、おまえは彼がイスラムに帰依するといった約束を果たすよう思い出させなさい。」と話した。

その後、エシュディンはアルマリクにあったハーンの宮廷に行ったが、警戒が厳重で、ハーンに会うことができなかった。彼は毎日早朝、ハーンの帳の近くで大声で祈りを唱えた。ようやくハーンの注意を引くことができ、エシュディンは宮廷に呼び入れられた。かれはハーンに自分の身分を説明し、ハーンのかつての約束を取りあげた。ハーンは非常に喜び、当日さっそく入教の儀式を行った。それから、エシュディンはモグール人たちがイスラム教を受け入れるよう説得し、成功した。

これはトゥグルク・ティムール・ハーンのイスラム改宗の有名な説話である。が、次のような口碑伝承が今日、伝えられている。それはロシアの中央アジア探検家プルジュワルスキーが1877年と1885年に天山地方、タリム盆地、とくにロプノール地方を探検した際に、当時の古老やイスラム聖職者などから集録した土着の民族誌である。それによると、「ロプノールの住民ははじめロプ市に住み、ケリヤと称し、仏教を信じていたが、のちニヤの殉教聖者イマーム＝ジャーファル＝アルサーディクによって強制的にイスラムに改宗させられた。このイマームは後に殺された。イスラム教徒であるロプノール地方民はスンナ派に属した。かれらの信仰が堅固でなかったので、チャガタイ汗国時代のイスラム聖者マウラナ・ユースブ・サッカキー Maulana Yusup Sakkaki がロプに軍隊を入れて、これを破壊した。これはトゥグルク＝ティムール・ハンがイスラムに改宗する3年前、つまり、1373年のことであった。ユースブ・サッカキーは生き残った住民のうち15家族をアクスウに移し、この町の近くにあるヤル・バシユ Yar-bashi に住ませた。」⁽²²⁾

プルジュワルスキーによって集録されたイスラム改宗の物語は、上記の『ラシッドの歴史』に記されているものとは異同がある。第一に、場所がロプあたりであるという点では共通しているし、ニヤの殉教聖者イマーム＝ジャーファル＝アルサーディクによって強制的にイスラムに改宗させられたと口碑資料は述べる。第二に、チャガタイ汗国時代のイスラム聖者マウラナ・ユースブ・サッカキーが不信心を理由に軍隊でロプを破壊した。これは仏教徒を殺害ないし追放したということであろう。第三に、15家族だけがアクスウに移住させられたという。15の門徒という数字のみは一致しているが、その理由が砂嵐という自然災害か、軍隊による人為的破壊かという点で異なる。

③エシュディン・ホージャ家の権勢

エシュディン・ホージャはその功績により、東チャガタイ・ハーン国における一族の宗教的地位を固めた。かれはトゥグルク・ティムール・ハーンの導師兼顧問に任じられ、天山南路地区のイスラム教長の職位を授かるとともに、その地位を世襲する特権をも享受した。ここに、クチャを中心とするイスラム教ホージャ勢力がタリム盆地に出現した。エシュディンは、アルマリクに滞在した1年間に、トゥグルク・ティムールにイスラム教の教義(教規)・礼儀・礼拝・斎戒と天課制度(ザカート Zakat 扎卡提という宗教税)及びスーフィズムの道乗思想等を教授した。彼がクチャに創立した「ワリーヤ(瓦里耶)経文学校」は財政上、トゥグルクの支援を受けた。当時の王室メンバーや王公貴族たちもこの学校で宗教教育を受けた。この学府はエシュディン・ホージャ家とスーフィ派の教

(22)前掲書『新疆ムスリム研究』178～179頁。

育センターで、多くのスーフィ派の弟子を養成した。これらの弟子はアクス・トルファン・チャリッシュ Chalish(察力失、清のカラシャール、現在の焉耆県)からカシュガル・ヤングィシャル(英吉沙)・ヤルカンドに至る各地に派遣され、エシュディン家の地位をさらに高め、スーフィズムのタリム盆地における影響を拡大した。

エシュディンの死後、長子のウフルパティヒディーン(烏甫爾帕提黒丁)が教長の地位を継承し、次子のアイブ・ナサルッディーン(艾布・納賽爾丁)はトルファンへの布教に派遣された。その後、アイブ・ナサルッディーンはヒジル・ホージャ・ハーン(黒的児火者汗)のトルファン攻略に協力し、トルファン地区の教長となった。

トゥグルク・ティムール・ハーンはさらに在世中、特別にエシュディン・ホージャに重要な特権を与えた。それは、ハーン位を継承したり大臣を任命したりする時は必ず教長の「認可」が必要であり、宗教的な戴冠式を挙行しなければならないというものであった。彼は死去前、諸子やアミール(艾米爾、異密)に、「私が亡くなった後、おまえたちはクチャに行って、エシュディン・ホージャに意見をきき、すべて彼に任せなさい。私の子供の中で、かれがパドシャー(国王、「帕的沙 Padshah」)に推挙するものが国王になるのだ。」と遺言を残した。

その後、ヒジル・ホージャがアルマリクで即位する前に、大臣フダイタ(忽歹達)は32名の官員からなる使節をエシュディン・ホージャを表敬訪問するだけのために派遣し、同時に100頭の馬、500頭の牛、1,000匹の羊、50頭のらくだ、15人の奴隷を送り届けた。教長の「恩恵」(認可)を経て、ヒジル・ホージャは正式に東チャガタイ・ハーン国のハーン位を継承した。これ以後、この「教長の認可」は制度化され、エシュディン・ホージャ家の政治的特権となった。ムハンマド・ハーン(馬哈麻汗)やワイス(ヴァイスとも)・ハーン(歪思汗 Vais Khan、在位1418～28年)らが即位した時も、ウフルパティヒディーン教長の「認可」を得た。もちろん通常ハーン位の獲得は実力のある宗王が武力によって奪うものであったから、この「教長の認可」という制度は一種の宗教儀式にすぎなかったが、東チャガタイ後王の新疆統治はイスラム上層勢力により維持・強化され、新疆のホージャ勢力もチャガタイ後王の支援のもとに発展したものであった。

エシュディン・ホージャ族は政治上大きな権勢を有し、宗教上多数の教民を支配していただけでなく、経済上ますます多くの利益・特権を獲得し、新疆南部の最大の封建領主となっていくた。その財富の獲得方法は、支配者からの「恩賜」、ワクフの土地と水利施設の占有、教民からの寄付、宗教税の収奪であった。シール・アリー・ウクラン・ハーン(失兒・阿里・烏黒蘭汗)はウフルパティヒディーンの求めに応じて、「ジャマルッディーン・マザールの世話」という名目で、アクスの500戸の農民をアクスのオイクル(鄂依庫爾、アインコ阿印科のこと、月牙泉)に強制移住させ、莊園を建設した。これらの農民は莊園の「エンチ(燕齊)」(農奴)とされたのであった。クチャ・アクス・トルファンでは、歴代の可汗が寄贈した良田沃土がホージャ家の莊園となった。たとえば、クチャのアルク(亜爾克)大渠、オウカンドタイジ(欧康達大吉)大渠やトルファンのウツタンキヤイ(烏次旦加衣)大渠などの灌漑農田はすべてホージャ家へのワクフの土地であった。

ホージャ家は教民たちがモスクや経文学校に献納するワクフの土地や財物も個人資産とし、これらの土地を破産した農民に小作に出して、半分以上の収穫物を収奪した。このほか、彼らは権力と地位を利用して、各地の商業貿易活動を支配して市場を独占し、公然と財物を取り立てたり、高利貸しを行なって暴利をむさぼったりした。『ラシッドの歴史』には、ホージャ家が「商業と農業で大量の財富を蓄積した」ことや、エシュディン・ホージャの後裔であるホージャ・タージュッディーンが「誰に対していかなるものを要求しようとも、拒絶に逢うことはなく、ハーン国全体のことで

彼に詳細が伝えられなかったことはなかった」ことが記述されている。

④チャガタイ後王家とエシュディン・ホージャ家の対立

しかし、エシュディン・ホージャ家の権勢が拡大し、さらに政治への関与を深めてくると、宗教貴族エシュディン・ホージャ家とチャガタイ後王家との矛盾も先鋭化し公然としたものになってきた。諸ハーン間の争いやホージャ家のハーンの権威に対する脅威は、エシュディン・ホージャ家のチャガタイ・ハーン国における宗教的支配的地位を動揺させた。ワイス・ハーンは即位する時にはウフルパティヒディーンの支持を得たが、ワイスは必ずしもウフルパティヒディーン的意思に従順ではなかった。

『明史・別失八里伝』によると、1418年(永楽16年)、ムハンマド・ハーンのを継いだナクシ・ジャハーン(納黒失只罕)はワイスに殺され、ワイスは自立してその部衆を従えて西に去り、国号を「亦力把里」(イリバリク)に改めたという。ワイス・ハーンの時東チャガタイ汗国の中心地はビシュバリクからイリバリクに移ったと考えられているが、それは上記のエシュディン・ホージャ家の影響力から脱することが目的であったかもしれない。

ウフルパティヒディーンはそこで、ワイス・ハーンとハーン位を争ったシール・ムハンマド(失児・馬黒麻、在位1421?～25?年)を合法的なハーンとして支持し、ワイスにハーン位を放棄させた。しかし、イスラム上層勢力も世俗の権力者には勝てず、ワイスは再びハーン位(在位1425?～32年)を奪還すると、ブハラのナクシュバンディー教団の托鉢僧の大マウラー(大毛拉)、マフマド・カッサニー(馬黒麻・カ桑尼)を宗教導師及び顧問として招請し、エシュディン・ホージャ家に打撃を与えた。

ワイス・ハーンの死後(1428/29年)、東チャガタイ汗国は二分され、長子のユヌースはイリ地方からタシュケントにいたる本土を領し、次子のエセン・ブハが天山東部のウイグルistanを支配した⁽²³⁾。ワイス・ハーンの子ユヌース・ハーンも意識的にエシュディン・ホージャ家を遠ざけ、中央アジアのスーフィー派の首領と盛んによしみを通じた。その後、エシュディン・ホージャ家はトルファン・チャリシュ地域のエセン・ブハ・ハーン(也先不花汗)とその後継者アフマド・ハーン、マンスール・ハーンに頼ることができるだけであった。この時には、東チャガタイ・ハーン国自身がその他の支配地域での影響力を大きく弱めていた。

16世紀半ば以後、中央アジアのナクシュバンディー教団のホージャ派が新疆に入ってきて、エシュディン・ホージャ家の宗教的地位にとって代わった。とはいえ、クチャ等ではエシュディン・ホージャ家は引き続き大きな影響力を持ち続け、近現代に至るまでその後裔たちはクチャ地区でのイスラム教の首領の地位を占め続けた。

おわりに

14世紀末にトルファンを征服したイスラム勢力と東チャガタイ汗国にとって、次の目標は新疆の東端ハミ地区であった。しかし、東チャガタイ汗国がハミを征服するまでにはもう百年ほどの時間が必要であった。それは、1368年に明が元を滅ぼして甘肅を占領し、ハミ地方にまで支配を広げたからである。15世紀に入ると、明は「哈密衛」を設置し、チャガタイ系のハミ王を「忠義王」や

(23) 嶋崎昌「第二章 東トルキスタン 第四節 トルキスタンの形成とその発展」、前掲書『中央アジア史』424頁。

「忠順王」に冊封し、その支配を強めた。15世紀半ばにハミは一時強勢を誇ったオイラト部に占領されるが、まもなく明との朝貢関係が復活した。

しかし、その後、イリ渓谷と天山以南に拠点を移した東チャガタイ汗国(それゆえウイグルスタン汗国とも呼ばれる)がハミに侵入を図ってきた。東チャガタイ汗国は1473年、88年、93年と3回ハミを占領したが、そのたびに明とハミ王によって奪回された。しかし、ついに1513年に東チャガタイ汗国のスルタン・ハーンに占領されて以後、ハミが明のもとに戻ることはなかった。東チャガタイ汗国はさらに国境の嘉峪関を越えて甘州・肅州へと侵奪を繰り返したため、明朝は1529年国境閉鎖と完全撤退を決定した。東チャガタイ汗国のハミ占領ではトルファンのエシュディン・ホージャ家(ホージャ・タージュッディーン)とハミのイスラム聖職者(シャイフ・フセイン)が内通し、大きな役割を果たしたことは第4節で述べたが、それは明朝の服属下にありながらもハミでは15世紀を通じてイスラム化が確実に進展していたことを逆に証明している。

ハミの征服によって新疆タリム盆地のイスラム化も達成された。とくに東チャガタイ汗国から政治上経済上大きな特権(典型的にはハーン即位と大臣任命の「認可」権)を付与されたエシュディン・ホージャ家は権勢を誇り、クチャ・アクス・トルファンで歴代のハーンから広大な良田沃土を寄贈され、タリム盆地で最大の荘園領主となった。が、エシュディン・ホージャ家が世俗的な権力を強めた結果、世俗の権力者であるチャガタイ後王との対立が先鋭化した。ワイス・ハーンやユヌース・ハーンは意識的にエシュディン・ホージャ家を遠ざけ、中央アジア・ブハラの子グシュバンディー教団から宗教導師を招請するようになり、16世紀半ばには子グシュバンディー教団のホージャ派にとって代わられた。が、クチャ等ではエシュディン・ホージャ家は近現代に至るまでイスラム教長をつとめ引き続き影響力を持ち続けた。新疆では、エシュディン・ホージャ家を嚆矢として、それ以後「ホージャ派」と称する「聖裔」たちがイスラム教の主流となっていった。